

商品陳列館の1996年度

外 山 徹

はじめに

現在、商品陳列館では伝統的工芸品を教育普及活動の重点対象として扱っている。展示されている伝統的工芸品はその殆どが“商品”として入手したものである。その意味では、一点一点の資料は百貨店や専門店の店頭に並んでいるもので、ある程度の金銭と引換えに誰でも手に入れることのできるものである。これは一般的によくイメージされる博物館の館蔵資料に対する評価一すなわち高価であったり稀少なものであったり、また、有名人の愛用したものである、という要件を全く満たさないものである。こうしたイメージが博物館に対する価値観としてよいものか否かは別にしても、一点一点の資料をただ右から左に展示するだけでは学習効果がないばかりか、人の注目を引きつけられないというのは自明の理である。そもそも、当館のうたう事業内容は、商品の生産・流通・販売のプロセスを提示することにある。昨年度『年報』のこの場にも記したが、当館には収蔵資料の特性からして、こうしたハードのみではなくソフト面に及ぶ学習材料を具体的に提示してゆく事が求められている。

1996年度の課題は、昨年までの伝統的工芸品の網羅的な展示から一步踏み出した、工芸品成立のグランドデザインを提示し、理解を深められるような展示その他の事業を行うことにあった。その最初の試みとして、愛知県瀬戸市と岐阜県東濃地方における伝統的な陶磁器産業をテーマとした企画展を開催し、附属三館合同の事業である入門講座の一本に「人と土と文化史」を加えることとなった。以下、前掲の課題への最初の答えとなる1996年度の活動を振り返ってみたい。

教育・普及

1 企画展「濃尾のやきもの～愛知県瀬戸市・岐阜県東濃地方の陶磁器産業～」展の開催
本年度は赤津焼（通産大臣指定伝統的工芸品・愛知県瀬戸市）、美濃焼（同・岐阜県多治見市、土岐市、瑞浪市、笠原町他）を中心に当地の伝統産業をテーマに企画展を開催した。「濃尾のやきもの」という名称は当館独自の造語で、一般的な意味での用語ではなく、いわんや「濃尾焼」という名称は存在しない。これは、当地の伝統的技法を用いた陶磁器やその系譜を引く製品が、「赤津焼」「美濃焼」という名称のみではカバーしきれないことからその総称としたものである。「濃尾」というのは瀬戸と美濃をセットとし愛知県・岐阜県の二県にまたがるという意味であるが、同じく旧尾張国に入る常滑焼は含んでいない。これは瀬戸と美濃が産地としてセットで取り上げうるのに対し、常滑焼は歴史的な経緯やその実態から瀬戸＋常滑＋美濃という形になし得ないからである。

展示の内容は、当地の陶磁器の最大の特徴である歴史的な釉薬の変遷を中心に原材料、製造工程、新商品の開発を紹介し、①産地の自然環境、②灰釉の時代、③陶祖伝承と鉄釉の出現、④桃山茶陶の全盛、⑤名古屋藩の保護と磁器生産の開始、⑥製造工程、⑦新商品の開発、という7つのパートで構成した。各パートの内容は次の通りである。

①産地の自然環境

愛知・岐阜二県にまたがる陶土の埋蔵状況を図示し、陶磁器の原材料である粘土と長石を展示。また、陶土採掘場と燃料である赤松の簇生を写真で紹介。

②灰釉の時代

「灰釉」2点と、技法の発祥がもとめられる平安時代の灰釉陶器の遺物写真を展示。

③陶祖伝承と鉄釉の出現

「古瀬戸」「鉄釉」各1点と、技法の発祥がもとめられる鎌倉時代製作の鉄釉花瓶の写真を展示。陶祖伝承に関する解説を付した。

④桃山茶陶の全盛

安土桃山時代に技法の発祥がもとめられる、「引出黒」「黄瀬戸」「志野」「黒織部」「織部」を合計6点展示。大名茶人古田織部に関する解説を付した。

⑤名古屋藩の保護と磁器生産の開始

江戸時代に技法の発祥がもとめられる「御深井」2点と、染付磁器9点を展示した。なお、染付磁器は厳密には江戸時代以来の技法によるものではなく、比較的近年開発された染付技法によるもので、江戸時代の染付技法



については写真で紹介した。

⑥製造工程

代表的な成形方法である“ろくろづくり”“たたらづくり”について、それぞれ半製品と製作現場の写真を提示しその工程を紹介した。また、釉薬原料と釉薬の調合比を紹介した。

⑦新商品の開発

陶製の洋食器、アイデア商品、オリジナリティの強い商品、近年開発・普及しつつある高強度磁器を紹介した。

こうした形での、原材料や歴史性、産地の地理的環境、製造工程、商品バリエーションの紹介は、本来、当館の教育普及活動の核となる部分であるが、スペースの関係から年間1・2品目を企画展という形で提示せざるをえない。その意味でいわゆる企画展としては異例の長い会期（約6ヶ月）を設定することとなった。会期は11月18日(月)から翌97年5月とし、前年度同様ポスターを印刷、大学付属・都道府県立・東京都内・近県の各博物館・図書館、ならびに関係諸機関に送付、パンフレットを作成し来館者に配付した。展示替作業は11月14～16日の3日間にわたり行ったが、博物館実習生の諸君、学内他2館（刑事・考古学博物館）の協力を得て、比較的短期間にもかかわらず完了することができた。また、資料の収集にあたっては、赤津焼工業協同組合理事長梅村晴峰氏、(有)霞仙陶苑の加藤霞仙氏、加藤裕重氏、加藤勝重氏、美濃焼伝統産業会館館長西部修氏、美濃焼伝統工芸品協同組合青年部長佐藤公一郎氏、土岐市立陶磁器試験場長大橋康男氏、写真の借用にあたっては大阪城天守閣、瀬戸市歴史民俗資料館、調査活動にあたっては多治見市文化財保護センターの田口昭二氏、土岐市商工観光課の鵜飼脩氏にご協力いただいた。この場を借りてあらためてお礼申し上げる次第である。

2 講演と映画の会

例年通り、学外から講師を招いての講演会を開催し、併せて映画の上映を行った。

日時；11月22日(金) 午後2時～4時

会場；明治大学駿河台校舎大学会館父母センター会議室

次第；挨拶 博物館事務長 熊野正也

講演 演題「流通新時代を切り開く・化粧品のマーケティング」

講師 (株)資生堂営業力開発部 水尾順一氏（肩書は講演会当時）

映画 手づくりの美日本の伝統工芸「赤津焼」(愛知県瀬戸市) 15分

ふるさと紀行・志野（岐阜県） 15分

1997年3月31日の再販制度全廃を目前にして、化粧品業界では新たなマーケティング活動が始まっている。その具体的な動きについて、業界最大手である(株)資生堂の水尾順一氏からお話をいただいた。講演内容の詳細については、後段掲載の講演要旨を参照。映画については、企画展の内容と合わせて愛知県瀬戸市の赤津焼、岐阜県的美濃焼に関するものを選定した。

3 博物館実習

昨年度同様、他大学の学長、ならびに学芸員資格課程担当者からの依頼に応じ、2大学

から合計9名の館務実習生を受け入れた。また、本年度から本学学芸員養成課程履修生の館務実習の受入を行った。新たに館務実習を開始するにあたって、カリキュラム編成上、また実習希望者全員を附属三博物館で受け入れたため、本学学生の受入についてはかなり変則的な形とならざるを得なかった。他大学からの実習受入要請、または一般的に言って館務実習は概ね2週間が目処とされるが、実習期間を4日間として同じ週に3名ないし4名ずつの受入形態をとることとなった。これは、過渡的な措置としてやむをえないもので、今後、ふさわしい実習の形態を目指すことが課程側、館側の協議で確認された。

実習期間および実習生氏名（順不同敬称略）、主な実習内容は下記の通り。

(1)学芸員養成課程からの館務実習の受け入れ

〔 前 期 〕

5月13日(月)～16日(木) 武田綾 癸生川心 荒木泉子
5月20日(月)～23日(木) 上原民江 石田陽子 金成幸恵 橋本圭右
6月3日(月)～6日(木) 菅原由香 鳥居あおじ 瀧澤和子 堀池尚明
6月10日(月)～13日(木) 馬場弓加里 三門順子 沼智一
6月17日(月)～20日(木) 吉富晶子 斉藤香織 渡辺道子

〔 後 期 〕

10月28日(月)～31日(木) 近藤有希子 高橋美絵 田中敏恵 采川緑里
11月11日(月)～14日(木) 前田衣世 掛橋千夏 鈴木智映子 池口芳恵
11月18日(月)～21日(木) 伊藤友美 真壁恭子 毛利るみこ 榎並さゆり

実習内容；日常業務の補佐（通年）

入門講座聴講（通年）

資料台帳カードの作成と資料の梱包（前期）

図書カードの作成と配架（前期）

企画展キャプションの製作（後期）

企画展にともなう常設展変更プラン作成（後期）

企画展展示替（後期）

(2)他大学からの館務実習の受け入れ

〔 通 年 受 入 〕

7月22日(月)～8月2日(金) 木村誠（専修大学3年）
9月30日(月)～10月12日(土) 掛谷崇（専修大学4年）
11月18日(月)～29日(土) 真島由紀（専修大学3年）

実習内容；当該期間の館務補佐

〔 夏 期 集 中 受 入 〕

9月9日(月)～13日(金) 西原悦子 迫田理恵子 中川晴子 古木友子
太田陽子 安岡彩

（以上、全員大妻女子大学4年）合計6名

実習内容；収蔵資料の整理（資料台帳カードの作成と資料の梱包）

図書の整理（図書カードの作成と配架）

日常業務の補佐

企画展展示計画私案作り（各人）

その他 各館の設備・展示の見学と意見交換会など

(3)見学実習

館務実習とは別に、下記の通り見学実習を受け入れた。

創価大学	5月25日	33名
関西大学	9月6日	35名
京都女子大学	11月2日	23名

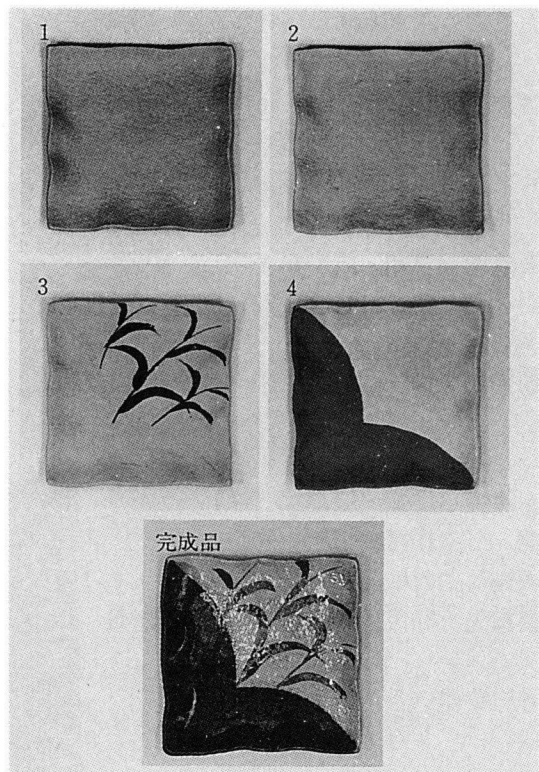
収集・保存

1 資料の収集

近年の重点対象である伝統的工芸品を資料として購入した。購入資料は5品目合計24点である。その内訳は、赤津焼（愛知県瀬戸市）5点、瀬戸ノベルティ2点、美濃焼（岐阜県多治見市他）8点、江戸簾（東京都台東区他）5点、香川漆器（香川県高松市他）4点である。

(1)96年度企画展展資料の収集

赤津焼は「灰釉」「御深井」の登窯で焼成したものを1点ずつ、“ろくろづくり”“たたらづくり”それぞれの工程を1セット、釉薬原料一式を購入した。美濃焼は「引出黒」「黒織部」「志野(赤志野)」「鼠志野(工程とも)」といった、赤津に比べて美濃的な色合いの濃いものを収集、また、「ローマ字鉢」「スープ碗」といった洋風のライフスタイルを意識したもの、「長良川石型菓子器」



赤津焼織部皿工程

「紫志野」など製作者個人のオリジナリティを前面に出した成形方法・釉薬を用いたものを収集した。赤津焼の「灰釉」「御深井」は、それぞれガス窯で中性炎焼成したものと対比させると、焼成方法の違いによる焼色の変化がよく理解できるようにした。美濃焼の「志野」は当地の原料の特殊性から鉄分が赤く発色し「赤志野」と呼ばれるが、赤津焼の場合鉄分が少なく「白志野」と呼ばれるのに対し、美濃焼の特徴を示すものである。「鼠志野」の工程は鉄釉の上から長石釉と重ねる独特の方法が理解できる。瀬戸ノベルティは、戦後間もなく米国を主なマーケットとして生産を伸ばし、一時生産が落ち込んでいたものを、瀬戸輸出陶磁器工業協同組合青年部などの尽力で再び生産が活性化しつつある商品である。

(2)その他の収集資料

江戸簾の場合、近年はその原材料の変化に特色がある。以前は“よし”を用いたものが

多かったが、湖沼・河川の護岸工事が進んだ結果“よし”の繁殖地が減少し、自然保護の点からも採取に制限が加えられるようになっており、竹を原材料とする割合が増えつつある。今回はこの2点に加え“ハギ”“ごぎょう”“イヨ竹”といった5種類の原材料による簾を収集した。香川漆器は一昨年の調査の成果として、蒟醬・指紋後藤塗・象谷塗・彫漆、という代表的な4種類の技法による製品をそれぞれ収集した。

また、3品目4点の資料の寄贈を受けた。詳細は後段の事業報告を参照。

2 資料の保存

新規資料台帳カードの導入を決定し、カードの更新を開始した。新規のカードでは、資料の細部に関するデータを書き込むスペースが大幅に増加し、展示・保存管理上の利便の向上が見込まれる。また、カードの更新にともない資料の梱包の更新を行った。

調査・研究

1 伝統産業の実態調査

下記の通り伝統産業の実態調査を行うため調査員を派遣した。

美濃焼（愛知・岐阜第2次）

期 日；8月21日(木)～22日(金)

調査員；外山

調査先；(株)佐藤陶芸 美濃焼伝統産業会館 高根山古窯跡公園志野の里
久尻元屋敷窯跡

赤津焼（愛知・岐阜第3次）

期 日；10月19日(土)～20日(日)

調査員；刀根館長 外山

調査先；(有)霞仙陶苑（登窯焼成取材）

香川漆器（香川第3次）

期 日；2月4日(火)～5日(水)

調査員；刀根館長

調査先；香川漆器工業協同組合



釉薬原料の展示

波草焼・飛騨春慶（岐阜高山第1次）

期 日；3月11日(火)～14日(金)

調査員；外山

調査先；飛騨春慶塗会館 高山市郷土館 (株)芳国舎波草製陶所 協業組合波草（柳造窯）
山田焼窯元 飛騨小糸窯 飛騨春慶連合協同組合

江戸簾

期 日；7月25日(木)

調査員；外山 木村（実習生）

調査先；(株)田中製簾所

東京染小紋

期 日；2月4日(火)

調査員；外山

調査先；樋口染匠



製造工程の展示

※実態調査にあたっては下記の調査項目を設定した。

- ・伝統的工芸品の製作工程について
- ・原材料の調達方法や製品の販売方法について
- ・地場産業としての規模の変遷について
- ・人材育成について
- ・商品開発について
- ・産地組合の役割について
- ・伝統産業および伝統的工芸品の歴史的変遷について
- ・伝統的工芸品の製作のバック・グラウンドとしての産地の気候・風土・地域的特質について
- ・その他

おわりに

以上、1996年度の商品陳列館の活動を概観してみた。本年度の課題に掲げた、伝統的工芸品のグランドデザインの提示については、企画展でいちおうの結果を出したつもりであるが、まだまだ残された課題は多い。今回取り上げた瀬戸・美濃の陶磁器に関してはこれまでの研究蓄積も多く、また赤津焼の場合、組合によってある程度産地の実態把握がなされているため、展示に必要なデータの収集を比較的短時日に行うことができた。他の伝統産業ではこれだけの前提が整っているとは考えられず、今後調査研究の方法、また各産業の特性によって展示方法も変わってくるはずである。これに対する対応が一点。それから、普及活動のあり方が昨年同様満足のゆくものではなかった。一方的な情報の発信ではなく、ある程度利用者側の興味・関心を把握し、展示見学、講演会への参加、ひいては自主的な学習活動へのモチベーションを高める方法を考案する必要がある。そして、将来的には利用者を主体とする自主・自律的な学習活動グループの結成・育成を実現する必要がある。これらは、既に生涯学習の理念として掲げられて久しいもので、それが実体をともなう意味で、なるべく近い将来に実現すべきものであろう。

(とやま とおる・明治大学商品陳列館学芸員)